

プロローグ

薄らと霧がかかっている湖の岬に、緑豊かな周りの景色とはまるで不釣合いな紅い館があった。

「それじゃ、お嬢様達の事は頼んだわよ」

そう言つて、館の玄関から紅いマフラーを巻いたメイド服の少女が姿を現した。

十六夜咲夜、この紅魔館を束ねるメイド長である。

咲夜は「はあ……」と白い息を吐きながら空を見上げた。

——空は灰色の雲に包まれ、今にも降り出しそうな天気であった。

咲夜は視線を正面へと戻し、館の周りに広がる庭園を眺めてみると、所々雪が積もっていた。

「……まったく、何時まで続くのかしら？」

そう呟くと、咲夜は正門へと歩き出したのであった。

咲夜が門口までやってくると、独りでに門が開かれた。

門を出ようとすると、目の前には白銀の世界が飛び込んできると同時に、門の表側には赤い髪の少女が立っていた。

「咲夜さん、おはようございます——って今日は早いお出掛けですね。買出しには早すぎませんか？」

そう言つて咲夜に声を掛けた少女は紅魔館の門番、紅美鈴ほんめいりんだった。

「おはよう美鈴、別にお買出しに行く訳じゃないわよ。ちよつと春までお暇を貰っているのよ。」

だから館の事は『こあ』に任せているから、何かあったらあの子に言ってね」

「え、そうなんですか？ ではどちらにお出掛けのご予定で？」

「そうね、強いて言うなら寝坊助を起こしに行こうかと思つてね」

「ね、寝坊助ですか？」

美鈴は頭の上にハテナを浮かべている。

「ねえ美鈴、いい加減おかしいと思わない？」

咲夜が美鈴に問い掛けた。

「そうですね。いくらなんでも遅すぎますね。たしかもう……」

美鈴は握っていた右手の指を一本ずつ広げる。

「五月——ですよね」

そうなのだ、既に五月を過ぎているのにも関わらず、一向に春が訪れる気配がない。ここまで冬が長引くのは今までには無かつた事だ。

つまり今、幻想郷の中では普通じゃない事が起こっているのだ。

「まったく、こんな異変が起きてるんだから、真っ先に解決に行かなければいけない奴は、一体何をしてるのかしらね。私達の時なんて真っ先にやってきたくせに……」

咲夜は腕を組んで不機嫌な顔をしていた。

「ああ、寝坊助を起こしに行くってそういう……」

咲夜が言っていた寝坊助が誰なのか、美鈴にも分かった。

「咲夜さん、あの巫女の所に行くんですね」

「ええ、さつさと叩き起こして解決して貰わないとね……あら」

咲夜の顔に、小さな雪の粒が当たった。

「さて、また吹雪になっても困るし、私は行くわよ。後の事はよろしくね」

「了解です！ お気を付けて行ってらっしゃいませ！」

美鈴はビシッと敬礼をして、咲夜を送り出す。

そんな美鈴を横目で見ながら、咲夜は雪の積もった土を蹴り上げ、博麗神社へと飛び去って行ったのだ……。

「くちゅん！」

博麗神社の土間で、小さなくしゃみが鳴り響いた。

「やだ、風邪かしら」

自分の手を額に当ててみるが、額の方が冷たかったので風邪ではないようである。

この人物は博麗神社の主であり、この幻想郷で唯一の巫女である東風谷早苗であった。

しかし、今は東風谷ではなく『博麗早苗』として過ごしており、本来の苗字を知っている者は今の幻想郷には存在しない。

「あ、そろそろ良いかな？」

早苗が側にある竈を見ると、鍋の湯がぐらぐらと煮立っていた。予め切っておいた白菜と茸を入れて、もう少し煮込ませる。

早苗は鍋の様子を見ながらぼーっとしていた。

（そういえば、私がこっちの幻想郷にやってきてからもう一年は経ったんだよねえ）

早苗は元々はこの時代の者ではない。今から数年後の幻想郷で、二柱の神と山の上で生活している風祝であったのだが、博麗神社で行われた宴会で酔い潰れてしまい、起きた時には過去の幻想郷へタイムリープしていたのだ。

本来は博麗の巫女として『博麗霊夢』という少女が居るはずなのだが、この時代には何故か彼女が存在自体しておらず、博麗の巫女が不在のままであったのだが、ひよんな事で早苗が博麗の巫女になってしまったのである。

早苗は他に行く所も無かったので仕方なく博麗の巫女となり、元の時代へ帰る手段を探しながら生活を続けていたのだが、八月になると幻想郷中が紅い霧に覆われてしまった。

早苗は魔理沙と共に異変の元凶である紅魔館へと乗り込み、一悶着遭った末に無事に解決する事に成功した。

これが後の紅霧異変と呼ばれる事件の一つであり、早苗が博麗の巫女として初めて解決した異変でもあった。

(普段の私だったら、もっと楽に解決出来ただけだなあ)

紅魔館のメンバーとは、元の時代で何回か手合わせした事もあって、相手の動き方にはある程度記憶している為に、早苗有利ではあるはずなのだが、二つのハンデを背負っている為にそう易々と勝つことは出来なかった。

ハンデの一つは、八坂神奈子と洩矢諏訪子との連携を使った攻撃方法や、スペルカードが使えない事である。早苗はこの二柱の力を借りて発動する物が大量に存在していた。

多いと言っても、ここ最近は自分の力だけで妖怪退治や異変解決をしようと思ひ、少しずつ変えて行こうと思った矢先であったので、レバートリー不足と言われてしまっても仕方は無い。

そこで試しに、外の世界に居るであろうこの時代の二柱に交信を行った事もあるが、幻想郷に張られている結界に阻まれている所為なのかどうか判らないが、一向に返ってくる気配はなかった。

それよりも、もう一つの方が致命的であった。

東風谷家には一子相伝の秘術を口伝によって伝えられてきたのだが、早苗もすっかりとその全てを受け継いでいたのだが、一つ残らず喪失しまった事である。ただのド忘れにしては洒落にならない状態だ。

これにより早苗は奇跡を起こす呪文も唱える事が出来ず、所持しているスペルカードのほとんどが使用出来なくなってしまった。

この大きな二つのハンデを背負う事により、大幅な戦力ダウンをせざるを得なかった。

とは言え、このままでは博麗の巫女としてこの先やっていく事が出来ないと思った早苗は、一つの策に出る。

それが霊夢の技を我が物としてしまう事であった。

早苗は悩んだ末、新しく技を作るよりも同じ巫女であった霊夢を真似てしまう方が楽であり、強力な技を繰り出せると思ったからである。

それに、今の幻想郷に霊夢は居ない。これなら胸を張ってオリジナルの技・スペルカードと言い張れる。

よって今の早苗は、一部の風祝の力と博麗の巫女の力を合わせたハイブリッド巫女になるのだが、霊夢のスペルカードを真似ようにも、一つ問題があった。

単純な話ではあるが、霊夢と早苗には大きな力の差があったのだ。霊夢の技を真似ようにも、形だけは同じに見えるが、速度・威力・その他諸々は霊夢よりもまだまだ劣ってしまった

ている。

(やっぱ霊夢さんって凄かったんだな……)

早苗は徐に袖口のポケットから陰陽玉を二つ取り出して放り投げると、陰陽玉は重力に引かれて落ちる事はなく、二つの陰陽玉は目の前をくるくると円状に回り出した。

ついこの前までは、片方の陰陽玉を操る程度がやっとであったが、ここ最近になって漸く二つの陰陽玉を操るぐらゐまで力を付けてきている。

「あ、もういいかな」

ふと鍋の方へ視線を戻すと、白菜がしんなりとしてきたので、早苗は急いで陰陽玉を手元に戻して袖口のポケットへ仕舞い込むと、急いで鍋の中に豆腐を投入する。

早苗が作っていた物は湯豆腐であった。

「よしこれで完せ——」

完成と言ひ掛けたところであった。勝手口の引き戸がガタガタッと大きな音を立てて揺れている。

早苗は反射的に勝手口へと視線を向けると、肩を落として溜息を吐いた。

「はあ……早く吹雪止まないかなあ、あとこの異常気象も」

外が吹雪になってから既に三日目になる。暦ではもう五月に入ったところであるが、今年の幻想郷は未だに春が来ない。

早苗はこれも異常気象の影響だろうと思っていた。

奇跡が起こればこの天候もどうにかなるだろうと思ったが、今の早苗には到底無理な話であった。異常気象相手ではどうにも出来ないの、時間が解決してくれるの待つばかりである。

「さてと」

早苗は両手にキッチンミトンをはめて、鍋を調理台へと運ぶ。

一度鍋を置いて、居間への襖を開け放つ。

「お昼が出来ましたよー」

居間の真ん中には半年前から稼働しているコタツがあり、そこには霧雨魔理沙きりさめまりさがごろんと寝転がりながら本を読んでいた。

魔理沙が寝転がっているコタツは、今の博麗神社の生命線とも言える存在で、万が一この天候のまま故障や停電なんて起こった日には、まともな暖房器具がない神社にとっては死活問題になり兼ねない。

魔理沙は早苗の声に反応し、本を閉じて上体を起こすと、体をぶるっと震わせて少し気だるそうな顔で早苗を見た。

「おー、待ってたぜ」

魔理沙が博麗神社にやって来てからちょうど三日が経っていた。魔法の研究が行き詰ったから気分転換に遊びに来たのだが、神社にやってくる途中に吹雪に襲われ、吹雪が止むまでは寒いし面倒だと言い張り、既に居候と化していた。

早苗は湯気が立ち上がっている鍋をゆっくりとコタツ台へと運ぶと、魔理沙の顔がパッと明るくなる。

「今日の昼食は鍋料理か！ 一体何なべ——」

魔理沙は嬉しそうに鍋の中を覗くが、中を見た瞬間に悄然としてしまった。

「……これだけ？」

熱々の鍋の中に入っていたのは、豆腐と魔理沙が持ってきた食用の茸、それにごく切りにされた白菜だけであった。

これでは鍋料理ではなく、ただの湯豆腐である。恐らく二人分のお腹を満たすには少々物足りない様に思える。

「これだけとは何ですか！ 十分に豪華なメニューです！」

早苗はムスっとした顔をしながら、再び土間へと戻っていった。

「これだけじゃ飯飯までもたないだろ……」

魔理沙は早苗に聞こえないようにほそつと呟いた。

——程なくして早苗が戻ってくると、早苗は取り皿と箸、薬味を配って自分の場所へと座った。

「こんな天気が続いてては買い物に行くのも大変だし、魔理沙が居候してる分、食料の減りが早いんだから少しは我慢して下さい」

早苗にそんな事を言われてしまうと、魔理沙ははぐうの音も出ないのでこれ以上文句を言

うのを諦めた。

そして、二人は手を合わせる。

「いただきます」

時刻は十一時三十分。少し早めの昼食を取る二人であった。